33

『甲乙経』における刺入深度・呼数の一考察

吉岡広記

『甲乙経』は晋の皇甫謐が編纂したとされる鍼灸専門書である。皇甫謐の自序によれば、『素問』『九巻』とともに『明堂孔穴鍼灸治要』という古鍼灸書が重要な構成要素となっており、現在通行の経穴三五〇余穴が記載されている現存最古の経穴書としても重要である。本書の巻三には三四九穴（単穴四九穴、双穴三〇〇穴）の経穴の位置、所属経脈、刺灸のドーゼなどが総括的に記載されている。四肢（手足）は十二経脈別に整理されているが、四肢を除く身体各部（頭、背、面、耳、頚、肩、胸、腋脇、腹の九門に分類）の経穴は、必ずしも経脈別に分類されていない。

実際の鍼灸施術を考える場合、施術をする経穴の選択、その位置、鍼灸法とそのドーゼが常に問題となってくるが、巻三の記載を通覧すると、経穴の位置、刺灸量の記載が整然となされているなか、そのうちの刺入深度、呼数（鍼の留置時間）に関するものに違和感を覚える。というのは、経穴の位置を特定する場合に骨度による尺寸法を用いているのは当然であろうが、同様に刺入深度においても尺寸法が用いられているからである。一見すると当然のことのように思える記述ではあるが、実際問題としていかにしてその深さを刺手で計ることができたのか甚だ疑問である。一方、呼数についていえば、明記されていない経穴が全体の約六割を占める中、なぜ特定の経穴に呼数を付し、またその回数に差異があるのか不可解なのである。

巻三所載の諸穴の灸の壮数表記を見ると、大略、一、三、五、七、九という奇数（陽の数）で統一されており、そこからは「陽気（熱）を補う」という陰陽論的な思想背景が容易に見いだされる。そこで、同じく巻三所載の刺入深度及び呼数も、計数的な数だけではなく、非計数的な性格をも兼ねそろえた数であろうと仮定して、様々な角度から、その法則性を検証してみた。

刺入深度については、①刺入深度のパターン、②刺入深度ごとにおける身体各部の関係、③身体各部における刺入深度の関係という三つの側面から検証した。その結果、刺入深度には一分～九分の連続性のあるもの、一寸・一寸五分・二寸・二寸五分という五分刻みのものの、二種の系統が見いだされた（例外として一寸三分が一穴ある）。また、大雑把な傾向ではあるが、体幹を陰（特に腹部を、より陰とする）、四肢（その中でも手を陽、足を陰とする）を陽とみる見方とに対応して、陽の部分はより浅く、陰の部分はより深くというように、陰陽論に基づいて設定されているという法則性が認められた。

呼数については、刺入深度の場合と同様、①呼数のパターン、②呼数ごとにおける身体各部の関係、③身体各部における呼数の関係、加えて④五兪穴、五要穴ごとにおける呼数の関係という四つの側面から検証した。呼数が記述されている経穴は一五〇穴（全体の四割）で、一～三呼、五～七呼、十呼・二十呼の三系統が見いだされた。このうち七呼は六七穴（約五割）で、そのほとんどは、手足の五兪穴、五要穴・背部兪穴・腹の募穴であった。「七」の詞義として『白虎通』に「陽数七」とあるほか、『大戴記』に「七主星」とある。同じく『白虎通』には「星者精也」とあるから、「七」には陽、あるいは精（精気）という非計数的意味があることがわかる。すなわち呼数もまた、陰陽的な概念と数字の思想的背景を複合させて設定表記されていると見られる。以上のことから、手足の要穴、背部兪穴という陽の部分の重要な経穴、あるいは募穴という陰の部分の重要な経穴を使用して、「留七呼」という刺法により「蔵（陰、五蔵六腑）の精気を補う」という意味を持たせているということが推定された。

『甲乙経』における刺入深度、呼数の表記の一部は、陰陽論や非計数的思想によって支えられていることが判明した。

（日本鍼灸研究会）